

京都教育大 神原 典子

〈目的〉 本報では、大分地方(一部福岡地方を含む)に居住する高齢者について、夏期・冬期の温熱環境への適応の実態を、大学生の結果と比較して報告する。

〈方法〉 実態測定は夏期の調査を1988年8月に、冬期の調査を1988年12月から1989年1月にかけて行った。対象者は夏期・冬期とも同一で、高齢者・大学生とも男女3名ずつ計12名である。調査項目は第1報で述べた通りである。

〈結果〉 1) 調査対象の高齢者は木造に4名、RC造に2名居住しているのに対し、大学生は木造に4名(一部鉄筋も含む)、鉄骨造に2名居住している。夏期は冷房しない自然室温の25℃～30℃前後で、冬期は10℃～24℃前後の採暖・暖房の室内で主として生活している。これら室温にはRC造住宅で日変動が少ないほかは特に構造による違いはみられない。2) 高齢者は大学生に比べ、活動量が低くまた冷房機器の使用程度も少ないので夏期には皮膚温の変動幅が概して小さい。しかし胸部の皮膚温は高齢者の方が周囲気温に左右されやすい傾向がみられ、冬期でも大学生より着衣量が多いにもかかわらず、胸部皮膚温の低下が認められる。一方、大学生は環境温度の変化が大きな中で生活しているにもかかわらず、皮膚温は全般に恒常を保っている。3) 夏期は特に暑い時にクーラーを使用する程度で、通常は扇風機で十分過ごせるとしている。4) 冬期の寝室はRC造を除いて7℃前後まで低下しているが、寝具を暖める用具を使う習慣はあまりなく、また夜間においてもほとんど単一の採暖・暖房器具だけで満足いく温熱環境が得られている。